

氏名・(本籍地)	江島尚俊(佐賀県)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第65号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	近代日本における「仏教」観の一研究
論文審査委員	主査 星野英紀 副査 鷲見定信 副査 弓山達也 副査 宇高良哲

江島尚俊氏 学位請求論文審査報告書

「近代日本における「仏教」観の一研究」

論文の内容の要旨

本論文は、近代日本の仏教者あるいは仏教学者による「仏教」観を検討することで、日本仏教と近代との相克の詳細を明らかにしようとするものである。

最初に、近代仏教研究者たちによる先行研究の吟味が行われる。その結果、本論文では、当事者が仏教をどのように見たかという「当事者性」という見地を尊重することが述べられる。第1章では、井上円了と村上专精を取り上げ、仏教を論じる際に両者が有していた目的を明らかにした。井上円了は、仏教に「宗教」としての資格を与える役目を果たしたことが強調される。それに対して村上专精は仏教研究に歴史的視点と方法論を導入することを行った。歴史的な背景を鑑み、仏教の展開の特殊性を追求していったのである。第二章では歴史研究が仏教研究の主流となったことで生じた大乘非仏説を分析した。井上哲次郎・姉崎正治・村上专精らを取り上げ、それぞれの仏教の歴史研究の特徴を抽出した。井上哲次郎は、釈迦を理性的な人間として描き出す手法をとった。西洋へのアンチテーゼとしての仏教論が目論まれていた。姉崎正治は、大乘経典の「宗教的熱情」を評価しつつも、原始仏教経典こそ真の仏説とする立場を強調した。村上专精の大乘非仏説は、大乘経典には「仏意」(=釈迦の真意)が伝承されているという見解から、大乘仏教は非仏説であるが非仏教ではないという立場を論じた。第三章では近代仏教の著名な潮流である「新仏教」と「精神主義」の機関誌(『新仏教』、『精神界』)を題材として、従来「近代的」と一括りにされていた両者の宗教論には普遍性もしくは特殊性を追求していたという違いがあったことを明らかにした。

「新仏教」においては、「宗教」や「信仰」の有効性を道徳や人格形成との関連で捉えるという方向性を打ち出し、「旧仏教」と決別することで、新しい仏教の姿を打ち出していった。一方、清沢満之の「精神主義」は、体験という個別性を重視した宗教論を展開した。そこでは、「宗教」とは個々人の体験を通して初めて得られる境地であるとされた。ただし両者に共通している点としては、個人を基盤に「宗教」を語っている点である。第四章では宗教学者・社会事業理論家として活躍した矢吹慶輝を中心に、彼の仏教論が近

代批判を含んでいたことを明らかにした。矢吹は、仏教に基づく「報恩」・「連帯共同」・「全縁総合」という思想によって、近代の問題点を乗り越えようとしたことを明らかにした。第五章では近代の中国布教に先鞭をつけた小栗栖香頂を取り上げて、彼の仏教論が近代的な日本仏教優位論に至った背景を明らかにした。そこでは対キリスト教に対抗しうるものは日本仏教だけであるとの小栗栖の立場が抽出された。小栗栖の根底には、天皇・国家とも分離されてしまった仏教への危機感があり、その意味で小栗栖が論じた仏教論は近代的な日本仏教論であった。第六章では、明治44年に行われた浄土宗「宗祖法然七〇〇年遠忌」を取り上げ、そこでの宗祖の変容に注目した。新しい仏教研究方法の影響が仏教研究だけではなく、具体的な布教の場に及んだという主張である。この遠忌の宗祖観は、伝説や神話的表現に彩られた近世期までの宗祖像ではなく「改革者として法然」としての歴史的人物としての法然であった。そこに歴史的事実性が重んじられる近代が如実に表れているという指摘である。

審査結果の要旨

本論文は、比較的新しい研究分野である近代日本仏教について、宗教学の最近の成果を背景に新しい見地を開拓しようとするものである。近代日本仏教は宗教史研究者たちにより研究蓄積がなされてきたが、近代史研究のもつ独特の困難さも手伝って、それほど多くの成果があるというわけではない。ましてや宗教学領域では最近注目を浴びてきた領域であり、その意味で本論文は重要な貢献をするであろう。江島氏は近代日本仏教思想界、学会のリーダーである井上哲次郎、井上円了、村上専精、姉崎正治らの仏教論を子細に検討し、かれらが西欧近代に成立した学問的方法や諸概念に大きく影響されながら、仏教の特色をいかに論じようとしたかを明らかにしようとしている。一般性の高い「宗教」という概念が導入され、仏教もその「宗教」という一般概念に当てはまるもの、あるいは当てはまらなければならないものという立場から、井上らの議論と主張がなされたという江島氏の指摘は正鵠を射ていると考えられる。

新仏教、精神主義の運動もまた、基本的には「宗教」であらんと欲した仏教者の運動として位置づけられる。しかし、一方が普遍性を重視し他方が個別性を重視したという特徴があるという指摘はそれなりに興味をわかせる指摘である。しかし精神主義が清沢満之没後も大きな影響を持ち続けたにもかかわらず、新仏教はそれほどの力を持ち得なかったという事実への分析もなされていると、さらに論文としての内容が充実されたのではないと思われる。矢吹慶輝については比較宗教学的研究を踏まえた仏教優位論であることは確かであるが、それが実際には当時の日本仏教界全体の主潮であった日本仏教優位論とどのような関係にあったのが不明のままである。法然遠忌に関する新しい法然像については確かに指摘通りであるが、それが一般の檀信徒にどれだけ浸透したものであるかを論じて欲しかった。さらに付け加えれば、浄土宗に限らず50年ごとの遠忌が現代に至るまで、各宗派の最大のイベントであるわけで、浄土宗ケースだけでなく他宗の遠忌との比較も是非欲しいところである。

さらに本論文の一層の課題といえるものをあげて見よう。まず第一に章ごとの独立性が強く、論文全体としての起承転結がよく見えてこないことは問題であろう。第二に、江島氏が強調するところの「当事者性」の視点をもって近代仏教者の言説を理解するという立場である。近代仏教/非近代仏教といった二項対立観あるいは現在の視点（価値基準とも言い換えられるか）での近代仏教を分析するというような従来にありがちであった視点を取らない、ということ自体は良く理解できる。しかし「当事者性」が具体的な分析になった場合に新しい視点として明確に浮き彫りにされているかということ、読者にとってはいささか分かりにくいのではなかろうか。たとえばかねてから現代宗教学で論じられている「共感的立場からの分

析」と具体的にどのように差別化されるのか、についてはいまだ説明が不十分である。

第三にここで取り上げられた仏教者たちをケーススタディとして取り上げた根拠はいかなるものであるかの説明が不足している。それに関連して、第四に分析した諸事例が近代仏教といわれる仏教全体のどれほどをカバーするものなのであろうか、という点にも説明がほしい。

このように、本論文は意欲的であるがまだまだ精査されるべき点を残している。しかしながら、膨大な資料がある近代仏教研究に対してその研究蓄積の少なさを考慮にあげれば、本論文の内容は課程博士論文としては十分なレベルと内容を持っているものとする。